

中学歴史 「日清戦争」をどう扱ったか

谷 口 尚 之

はじめに — 「近現代史」をめぐる最近の動きにもふれて —

過日、第二次世界大戦中のナチスによるユダヤ人大虐殺を当時の関係者による証言で綴った映画『ショア』をみる機会を得た。その一場面である。ワルシャワ・ゲットーの管理担当であった元ナチス補佐官が、詰問するようなインタビューにたじろぎながら応じていた。「一か月に五〇〇〇人が死に、この世の地獄と化したゲットーを管理していたあなたが、何も知らなかった、何もできなかったなどといえるのか」矢継ぎ早の厳しい問いに元補佐官は言葉に窮しながら、苦し紛れのように「それは今だからいえるんだ。当時は何も・・・」を繰り返した。「何もできなかったのだ。当時の状況を考えれば仕方ないことだったんだ。」と言いたげだった。

私が大学時代に感銘を覚えた講義のひとつに、石戸谷重郎先生の「西洋史概説」がある。熱のこもった講義の内容を記したノートを私は今も大切に残している。その最初の講義で紹介されたのがE・H・カーの『歴史とは何か』であった。「歴史とは現在と過去との対話である」という有名な言葉は、それまで歴史上の人物の生きざまや戦い、事件の顛末だけで歴史

好きになっていった私にとって衝撃的なものであった。大学を卒業し、教壇に立つようになって教科書の記述をみる時も、また授業を構想する時も、常に『歴史とは何か』で学んだ歴史認識をアプローチの基本にしてきた。

しかし、この二、三年、歴史教育あるいは平和教育をめぐって喧しく行われているキャンペーンは、私が大切に考えてきた方向とは大きく異なるように思う。「自由主義史観」と自称している人々の主張である。本稿は、あくまで「日清戦争」を中学校の歴史学習でどう扱ったのかを報告することが本意なので、「自由主義史観」について長々と論ずることは避けたいが、彼らが「近現代史」にターゲットを絞り、日清・日露戦争をテーマの一つとしているだけに、一顧もせずというわけにいかない。

「自由主義史観」は次の四点を柱としている。

①健全なナショナリズム ②リアリズム (国家・国民の生存と繁栄を最高の目的とする「戦略論」の見地の重要性)

③イデオロギーからの自由 ④官僚主義批判 (自由主義は軍国主義には反対したが、軍事一般を否定したことはない)

これらの柱から、「東京裁判史観」・「コミンテルン史観」の克服、「自虐的・反日的日本人を再生産」する授業から自国に対する肯定的イメージに裏付けられた²⁾授業へ等々の主張が唱えられ、さらに九六年からは中学校社会科教科書からの「従軍慰安婦」記述の削除を求める政治運動へと展開してきた³⁾。

「自由主義史観」の論客の一人である高橋史朗氏は最近の論文で、戦後日本の歴史教育の問題点を、西尾幹二・坂本太郎氏の歴史教育論を参考に、次の四点にまとめている⁴⁾。

①過去の日本の対外戦争を、単純な二分法論理の善玉悪玉史観に立脚して、「戦争勢力」と「平和勢力」という二つに割り切って、一方的な「侵略戦争」とみなしている。

-
- ② 歴史にあまりにも倫理的評価、すなわち、侵略戦争か否か、平和的であったか否かなどを持ち込みすぎている。
 - ③ 歴史は科学的でなければならぬとして、普遍的客観的事実から成り立つ動かない世界という前提に固執している。
 - ④ 歴史のすべてを抵抗と敵視の系譜としてのみ認識していることである。その根底には体制は悪で、反体制が善であるという単純きわまりない思想がある。
-

そして、こうした戦後の歴史教育の根底には、「東京裁判史観」・「コミンテルン史観」・「日教組の反日史観」・「中国・韓国の反日史観」という四つの反日史観の源流があるというのである。

高橋氏は第二点に関連して「過去を現在の価値基準に合わせて切り捨て断罪することは間違っている。その時代はその時代の価値観において共感的に理解することが大切である。」と述べている。この発想は、現在という「眼」で過去を見、過去の歴史事象から現在の社会をみようとすると歴史研究のあり方を重視してきた者には承服しがたいものであるし、第三点の指摘も、サイエンスとしての歴史学を否定し、「歴史をロマンで語ろう」とするもので、氏が「あやふやな相対性と個別事実の絶対性との人間的解釈の相剋の世界こそ歴史だ」などと言葉をついででも詭弁にしか聞こえない。

冒頭で紹介した映画『ショーア』の元ナチ党員の証言と、「自由主義史観」を称する人々の主張にどれほどの違いがあるか。前ドイツ大統領ヴァイツェッカーが、戦後四〇周年の記念式典で述べた「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目になる」というあまりにも有名な言葉を、私たちは改めて心に刻まなければならないのではないか。

本稿で取り上げようとする「日清戦争」は、彼ら「自由主義史観」研究会が議論の俎上にものせる要もなく「義戦」としているものである。しかし、「日清戦争」は本当に正義の戦いだったのだろうか。日本および東アジアの近・現代史学習のなかで、どのような位置づけが必要な事象なのか。以下の実践報告を通して考えてみたいと思う。尚、実践報告は九五年の

公開授業の指導案および研究ノートをもとにしている。

一 「日清戦争」という題材について

次の文は、自由主義史観研究会が出版し、発行部数の多さがキャンペーンの材料の一つにもされた『教科書が教えない歴史』⁽⁵⁾の一部である。

「不平等条約改正の端緒をつかんだ日本」

・（福沢は）『福翁自伝』の中で日清戦争を振り返って、「愉快とも有り難いとも言いようがない。命あればこそコンナことを見聞きするのだ、前に死んだ同志の朋友が不幸だ、アアみせてやりたい」と書きました。

・日清戦争に勝利を収めたことによって、日本は幕末以来の不平等条約を改正する端緒をつかみ、東アジアの市場で欧米列強と経済的に競争する機縁を得ることになりました。福沢諭吉の、日本を欧米列強の一員にしたいという年来のねがいがかえらるる大きな一歩となったわけです。（小笠原幹夫）

日清戦争は、明治維新政府の外交上の最重要課題であった不平等条約の改正を成し遂げる第一歩であり、指導要領にいう「国際的地位の向上」に大きく寄与した出来事であるとする立場から、福沢諭吉にかかわる「お話」が語られている。当然のこととして、世に知られる「脱亜論」を紹介することなどはない。

「自由主義史観」の立場からの実践は日露戦争を取り上げたものが多いが、『近現代史』の授業改革²』（明治図書）所

収の深澤秀興氏の実践報告⁽⁶⁾には、ノルマントン号事件から日露戦争までの四次にわたる授業の骨子が示されており、彼らの主張が、教育現場でどのように体现されるのかがわかって興味深い。

深澤氏は小学校指導書社会科編の要点を、①日清・日露戦争が「国の安全を確保する」ことに成功した戦いであったこと②他民族に損害を与えた「戦争の影の部分にも気付かせること」としながら、従来の実践が「明治政府の基本的対外政策は朝鮮・中国への武力侵略であり、東アジアの政治的支配をめざす膨張主義路線であった」とする、一面的な歴史観をもとにしてしていると批判し、①の要点に依拠した「明治維新を成し遂げた指導者達が、厳しい国際環境の中で、近代国家の法体系を整備し、日清・日露の戦争で国の安全を確保し、国際的地位を向上させた」という指導目標を設定している。

「国の安全と日清戦争」と題した授業は、ロシアの領土拡大図などをもとにロシアの侵略性に気付かせ、子どもたちを当時の人々と同様のロシア脅威論に導き、最後にビゴアの絵の橋上に誰を描けばよいでしょうと問うというものである。まさに筋書き通りの展開なのだが、途中、「日本はなぜ、朝鮮を自分のものにしようとしたのかな」という重大な発問をしている。これに対する子どもたちの反応は面白いが、氏はその答えを下関条約から考えようとし、「実はね、清と戦った一番の理由はね、清に朝鮮の独立を認めさせることだったんだよ」と述べ、その意味を考えようと言いながら、「朝鮮の独立を求めたのは、ロシアから日本の安全を守るためでした」と解説する。授業の最後に「(橋の上にいるのは)ロシア人です」と元気に答える子どもたちが、この大切な場面で発言していない。《日本が清と戦ったのは朝鮮を独立させるためで、それはロシアの脅威から日本を守るためでした。》などという説明で子どもたちが納得したのだろうか。《それじゃ、結局日本は自分の安全のために朝鮮という国を自分のものにしただけじゃないの?》《そんなことをして朝鮮の人たちは何も言わなかったの?》素直な子どもたちからこうした疑問が出てきて当然なのではないだろうか。

安井俊夫氏は最近の論文で、歴史の授業論の立場から「自由主義史観」批判をしている⁷⁾。安井氏は藤岡氏らのすすめる日清・日露戦争の授業に関して、最も欠落しているのは「歴史の主体としての朝鮮」という視点であると指摘している。藤岡氏は福沢諭吉が脱亜論を書いた認識と同じレベルで朝鮮近代化の挫折をみて授業を構想しているが、それは現在明らかになっている事実をみようとしないものである。今日、韓国の学校では、甲午農民戦争の最中、李朝封建社会への根本的な改革の提起がなされ、近代化への一步を踏み出そうとしていたことを学習している。とすれば、私たちも、「歴史の主体として」歩みだそうとした朝鮮を、自らの国益のために圧殺したのが「日清戦争」の一面であることを認識することなしに授業を組み立ててはいけないのではないだろうか。深澤氏の授業を受けた子どもたちの、声にならなかった疑問が授業で出され、その答えを探究することが「日清戦争」の学習の核心に迫る実践になるのではないだろうか。

安井氏は同じ論文で次のように述べて「自由主義史観」の主張に異論をとなえている。

「そうするしかなかった」という判断を日露戦争以後何度か繰り返すことによって一九四五年の破綻に向かっていくことは、同時代には見えなかった（見えにくい）ことだが、一九四五年までの歴史を学んでいる学習者にはよく見えていることである。歴史の授業で重視されるべきは、そのように同時代ではできなかった判断材料を提供することであり、そうやって過去のなかに克服すべきものがあるのなら、それを議論できるようにすることである。

日清戦争研究の第一人者である中塚明氏も、陸奥外交を解明した『蹇蹇録』の世界⁸⁾で、藤岡氏らの動きを予見するよ

うに警鐘を鳴らしておられる。では、日清戦争の性格や意義をどうようなものと捉えて授業を構想すればよいのか。これについては、藤村道生氏・中塚

明氏・姜在彦氏・姜東鎮氏・朴宗根氏らの諸論文をはじめとして、歴史学者の真摯な研究の成果が蓄積されているので、次にまとめて列挙してみたい。

- ① 日清戦争は近代日本が最初におこなった本格的な対外侵略戦争であり、十五年戦争での日本帝国主義の破局に至る長い戦争史の序幕をなすものである。
- ② 日清戦争によって、日本は台湾を植民地として領有するアジア最初の帝国主義国となり、「圧迫される国」から「圧迫する国」へ転化した。
- ③ 東アジアに帝国主義を成立させる契機をつくり、台湾・朝鮮・中国をしてつぎつぎと植民地、半植民地に転落させた戦争であった。
- ④ 日清戦争は朝鮮と中国の民衆を抑圧し、その近代化を阻害した面を持ち、特に朝鮮では近代的改革を目指した農民の蜂起を圧殺し、朝鮮民衆の自主的変革への道を妨げた。戦後は帝国主義の抑圧下にはいった諸民族をして、反封建・反侵略の民族解放運動を本格的に展開させることになった。
- ⑤ 戦争の原因は、資本の原始的蓄積が急激に進行した日本資本主義の形成にかかわって、さらなる資本の蓄積のために朝鮮に原料市場を求めたものであること、仏露に対抗するイギリスの東アジア戦略を背景としたものであったこと、さらに藩閥政府が、野党との決戦場と化していた帝国議会を乗り切るための方策の一つとしての派兵という面もあったことなどが挙げられる。東学農民の反乱や清からの朝鮮の独立援助、ロシア脅威論等は、「日本がなぜ朝鮮を自分のものにしようとしたのか」という核心的な問いに対しては、あくまで副次的なものである。
- ⑥ 戦いの経緯をみれば、朝鮮の甲午農民戦争に対する出兵・弾圧を口実として始まり、独立を宣言した台湾民主国に

対する流血の弾圧に終わったことを正しく教えるべきである。特に、戦闘の開始が7月23日の日本軍による朝鮮王宮占領から始まっていたこと。しかもそれが、その後の戦いを有利に進めるため、日本公使館・日本軍が一体になって仕組んだ計画的戦闘行動であったことを指摘し、「日清戦争はまず朝鮮国に対する戦争から始まった」ことをおさえなければならぬ。

⑦ ほかに、国際的な大事件となった旅順虐殺事件、講和後に四か月もかかった台湾の制圧^⑪、大本営が置かれた「加害者」としてのヒロシマ、朝鮮の人々が日本軍の侵攻を秀吉による壬辰倭乱と同一視していたこと^⑫など、「日清戦争」という教材を授業化するにあたって組み込まなければならない材料は数多い。

二 授業の実際

——「日清戦争は正義の戦争だったか」——

次のような単元設定のもと、前述のような諸点をふまえて行った授業（九二年一月）について、授業の細案と板書、授業プリント等を示して報告としたい。

◇単元 「日本の大陸侵略」

◇単元目標

○ 日本の政府や軍部・資本家等は、原料や市場を求め、国民の不満をそらすため、大陸侵略を企て、朝鮮や中国に侵出し、日清・日露戦争を起こしたことを理解させる。

○ わが国の資本主義が、政府の保護政策、低賃金で長時間という過酷な労働、対外侵略による市場の獲得等によつ

て急成長したことをわからせるとともに、それが極めて不均衡な発達であったために、多くの矛盾をはらんでい
たことも考察させる。

○ 欧米列強と日本の帝国主義的侵略によって、アジアの国々が植民地化されたことを理解させるとともに、これ
ら被植民地及び日本では、自国の封建諸勢力に抵抗し、さらに独立や平和を求める民衆の運動が起こったことを
理解させる。

○ 資本主義の発達のために様々な問題がおこり、過酷な労働に苦しむ人々の中から労働運動や小作争議等が発生
し、社会主義運動が芽生えたことを理解させ、それが政府によって厳しく取り締まられたことをわからせる。

◇指導計画（全9時間）

- | | | |
|-----|---------------------|---------------------|
| 第1次 | 「亡国条約を阻止せよ」 | ↳ 初期議会と条約改正↳ |
| 第2次 | 「日清戦争は正義の戦いだったか」 | ↳ 甲午農民戦争と日清戦争↳ ↓ 本時 |
| 第3次 | 「廿世紀之怪物 帝国主義」 | ↳ 列強の世界分割↳ |
| 第4次 | 「極東の憲兵」 | ↳ 義和団事件と日英同盟↳ |
| 第5次 | 「日露の戦いと民衆」 | ↳ 日露戦争↳ |
| 第6次 | 「生系が軍艦を生む」 | ↳ 日本の産業革命↳ |
| 第7次 | 「地図の上 朝鮮国にくろぐろと・・・」 | ↳ 韓国併合↳ |
| 第8次 | 「革命はまだ成功せず」 | ↳ 辛亥革命と中華民国の成立↳ |
| 第9次 | 「民を殺すは国家を殺すなり」 | ↳ 社会・労働運動の高揚↳ |

◇本時のねらい

○ 朝鮮の民衆が、日本をはじめとする外国勢力の侵出と政府の圧政のために困窮していったことを理解させる。

○ 「外国勢力の排除」と「悪政改革」を求めた朝鮮民衆が、東学運動を結集の拠り所として立ち上がったことを理解させる。

○ 日清戦争は日本と清の朝鮮支配をめぐる戦いであると同時に、高まりつつあった朝鮮民衆の近代的改革運動を圧殺した戦争であったということを考察させる。

◇本時のながれ (▽: 指示、□: 発問、○: 説明)

*紙数の都合上、指導過程の一部を省略しました。

学習活動	おもな発問と指示等	指導上の留意点
1 導入	<p>▽まずこのテープを聞いてください。</p> <p>□「何語で歌われていましたか？」</p> <p>○この歌が今も朝鮮や韓国で親しまれている童謡であること 大学の留学生金さんに歌ってもらったことを紹介</p> <p>○この歌の意味を説明する(板書しながら)。</p> <p>・「鳥」「青い鳥」 外国の侵略者(日本や清)</p> <p>・「緑豆」 全捧準</p> <p>・「青舗売りばあさん」 朝鮮の民衆</p>	<p>・タイトル、教科書の頁などは板書しておく。</p> <p>・テープ(金昇希さんの歌)を聞くことに集中させる。</p> <p>・歌詞を黒板に貼る。</p> <p>・答えはプリントに書き込むよう、指示する。</p> <p>・TV画面に全捧準の写真を映す</p>

<p>・宮廷内の勢力 争い</p>	<p>3 展開Ⅱ 「農民の蜂起」 ・蜂起の理由 ・二月蜂起</p>
<p>時の朝鮮の様子を読み取ってください。(プリントの詩を読む) □この詩からどんな様子が分かりましたか? ○(生徒の答えから)「民衆の困窮」「政府の腐敗」について補足説明をする。 ○宮廷内の勢力争いも続いていたことを説明する。(事前学習の確認として、閔氏と大院君の対立に触れる程度) □壬午軍乱・甲申事変によって、朝鮮における日本と清の立場はどのようなになりましたか? ○留意点の内容のみ説明する。</p>	<p>□一八九四年二月、立ち上がった全捧準らの農民軍が掲げた「斥倭洋倡義」というスローガンの意味は何ですか? ○「斥倭洋」とは「日本や欧米列強の排除」、「倡義」とは「正義を唱える」悪政改革であることを説明する。 ○二月の蜂起について、以下説明する。 ・全羅道の古阜で起こった局地的なものであったこと ・郡守趙秉甲の虐政が原因だったこと</p>
<p>・政府の腐敗(わいろ、売官など)の様子を説明する。 ・この二つの事件で日清が対立し、結果的に朝鮮における日本の立場が後退したことのみ確認する。</p>	<p>・「斥倭洋」「倡義」という二つの内容であること、漢字の意味を説明する。 ・後半の時間確保のため、二月と五</p>

・政府の対応

・再蜂起

・全州占領

・政府の対応
(清への援軍

要請)
・農民軍の判断

・参加した農民は、千人余だったこと

・役人が横領した米を奪い返し、分配すると解散したこと

○農民の蜂起に対して、政府は「民乱調査」と称して略奪や放火、逮捕を行ったこと、それが五月の再蜂起の原因となったことを説明する。

○農民軍が目標をしっかりと掲げ、規律をもって戦いを進めたことを「四つの誓い」から説明する。

○五・三一、農民軍が全羅道の首府全州を占領したことを、説明する。

□農民軍の全州占領に対して、政府はどうしましたか？

○一部に反対はあったが、結局、壬午軍乱・甲申事変同様の「手」(清に応援を頼む)でいくことにしたこと説明する。

▽日清の出兵を知った農民軍はどうしたか？ 次から選びなさい。

- a. 外国に応援を求めた政府を非難し総攻撃を開始した
- b. 日清両軍に口実を与えないよう妥協して引き上げた
- c. 政府との戦いを止め、日本軍との戦いを始めた

月の蜂起をまとめて説明する。

・プリント裏の資料Bの決起宣言は時間があれば是非読んでみたい。

・全州は、李氏の本貫地であったことにふれる

・板書するのは、下線部のみ

・班討議させたいが・・・。

・時間があれば、選択した理由を問いたい。

<p>4 展開Ⅲ 「日清開戦」</p>	<p>・全州和約</p>
<p>○正解はbであったこと。特に情勢判断が的確であったことを説明する。</p> <p>○農民軍が政治改革案（プリント）を政府との間で交わし、一斉に撤退した（6/11）ことを説明する。</p> <p>□農民軍が撤退したことで、朝鮮政府は日清両軍に何を求めましたか？</p> <p>○朝鮮政府が、撤兵を求めたことを説明する。</p> <p>□日清両軍は、どのような対応をしましたか？</p> <p>○清は撤兵に応じたが、日本は国内の事情（議会や世論の激しい政府批判、対清・韓強硬論）から撤兵に応じなかったことを説明する。</p> <p>□列強の対応をおそれ、清との戦争に踏み切れなかった日本に、開戦を決意させた出来事とは何か？</p> <p>○ロシアの南下を警戒したイギリスが、条約改正に応じる形で、日本の行動を承認したこと説明する。</p>	<p>○農民軍の情勢判断の良さとともに改革案の先進性（封建遺制撤廃や制度改革、外圧排除など）に注目させる。↓「甲午改革」に継承されたことにも触れる</p> <p>・教科書から</p>
<p>・国内事情については、議会の内閣弾劾上奏案可決のみに触れ、政府が「一大事業」の必要性に迫られたことをおさえる。</p> <p>・条約改正というヒントを与える。</p>	

5 展開IV

「再々蜂起」

□日清開戦から三か月、全捧準らは三たび蜂起する。今度は数十万ともいう農民軍だった。彼らの蜂起の目的と戦った相手は？

○彼らの目標が「反日」であったことを確認する。

□なぜ日本軍を憎み、追い出そうとしたのか？

○兵站が不備であった日本軍が、食糧や輸送をすべて現地調達

(朝鮮民衆から奪う)しようとしたことを説明する。

□今度の蜂起の結果はどうなったと思いますか？

○農民軍は敗れ、全捧準は捕らえられ、ソウルで処刑されたこと、

その後の日本軍のきびしい掃討で、三〇〇四〇〇万の朝鮮民衆が

犠牲になったことなどを説明する。

・全捧準は、これを「秀吉の朝鮮侵略」と同一視していたことにふれる。

・ヒントを与えて、できれば班で答えを考えさせたい。

・この戦いは、四五年の独立達成に至るまでの朝鮮人民の抵抗運動の出發にもなったことをおさえる。

◆ 板書事項

(日清戦争は正露の戦争だったか) ~○○○○戦争と日清戦争~ (p 210-211)

~朝鮮の歴史~

「緑豆」将軍

= 全義拳 (チヨンホンクン)

島よ島よ青い島よ

↓

緑豆の島に下り立つな

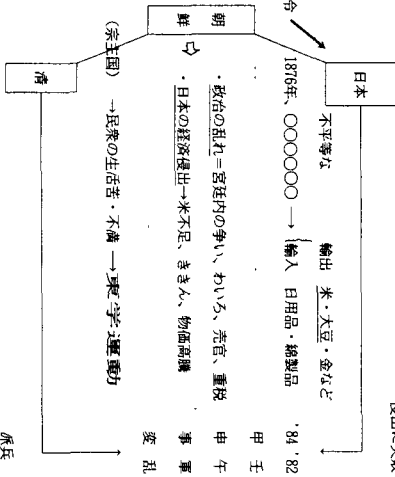
甲午農民戦争の指導者

青輪売りはあさん 泣いていく

'95 4 処刑 (41才)

1 19c末の朝鮮は、どんな様子だったか?

輸出に失敗



2 甲午農民戦争 ~全義拳らは何を求め、誰と戦ったのか?~

1894年2月 全義拳ら、全羅道古阜で蜂起 (“斥候在留黨”)

↓ →不正役人から糧領米を取り返す

政府によるきびしい弾圧 (捕索・略奪・放火・逮捕)

↓

5月 全義拳、再蜂起を呼びかける → 農民軍約1万、全州を占領

農民軍

4つの誓い

・人を殺すな 物を奪うな 日本と外国勢力を追い払え

・忠孝を尽くし、庶世安民せよ 人殺して、権力者を倒せ

政府の前に “二つの道” → 内政改革の清の要軍要請

→ 日清両軍侵入にきっかけ

Q ここで農民軍はどうしたか?

a. 外国に支援を求めた政府を非難し総攻撃を開始した

Ob 日清両軍に口実を与えないよう要請して引き上げた → 「なぜ?」

c 政府との戦いを止め、日本軍との戦いを始めた

6 10 「全州和約」

- 不正役人の処罰
- 封建的身分制度の廃止
- 雑税の廃止
- など12項目の要求を示し、解散

朝鮮政府 → 日清両軍に撤兵要求 → 日本軍受け入れず

↓

7月末、日清開戦 (日本の朝鮮王密使入から)

Q 朝鮮はどうなったか?

・日本軍は、倉庫その他を現地調査 (奪う)

・日清両軍の戦場になる

1 0月、全義拳ら農民軍、再蜂起 (“反日”を旗印に)

公州の戦いで日本軍・政府軍に敗れる

→ 日本軍による捕縛の犠牲者は、3 0 ~ 4 0万人という

Point
 ・日清戦争は本当に正義のための戦争だったのか。日本軍の戦いぶり、講和条約の内容、その後の清国を学習して、本時のテーマを考察してみよう。

③ () の「版図編」1895.3

我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの庸子ある可らず、むしろ 伍を脱して西洋の文明と進歩を共に、其支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の急務に及ばず、正に西洋人か之に接するの風に従て処分す可きののみ。要友を頼む者には共に要名を知る可らず。我々は心にして亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり。



④ () Justification of the Korean War

吾人は信ず、日清戦争は吾人に取っては実に善戦なりと。其義たるの法的にのみ善なるにあらずして、倫理的にまた然り。... 吾子を世界に供せし吾那は、今や聖人の道を知らず。文明国か此不実不信の國民に對するの道は唯一途あるのみ。殊血の道なり。

2. インテリゲンチ

1. 日清開戦

(1) 右の宣戦布告文をみて、兩國に共通する本音と建前(表向き理由)を答えなさい。

①本音

②建前

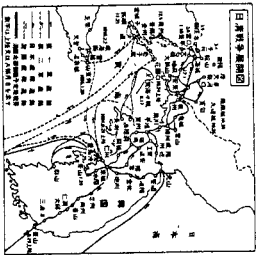
(2) 1か月余り軍隊を朝鮮に駐留させていた日本軍が7/23、朝鮮王宮を占領し、さらに7/25 露島で清國艦隊を奇襲して強引に開戦したのはなぜか?

①外交上の理由

②国内政治上の理由

日本「朝鮮は独立国であるのに、清國は自らの屬國たごいつに内政に干渉し、朝鮮の権益をかきめ、東洋の平和をゆくづくなつたので、我々はやむを得ず戦う」
 清國「朝鮮が清國の屬國であることは200 余年以前のことであるのに、日本は朝鮮を勢力で奪かして条約を打ち込みを救うため出兵する。清國は韓國民の苦しみを救うため出兵する」

<日清兩國の宣戦布告>



2. 戦闘の様子



日本の優勢が伝えられる中、朝鮮の民衆はどのような行動に出たのか?

「兵士ト見テ物ニセンソト欲フ、朝鮮中ノ人ト見テモ樹ヲ折ツテナリ、故ニ道路等ノ死人ノ人ニテ行進ニモ不便ナリ、人家ノ居ル所皆破入、大抵ノ家ニ三ヨリ五六人死シ、時酒成ノハ必シ斃ル、死者ヲ分捕リ、テラ皮ヲ分捕リ、酒ニ煮キ得役入中ニシテ、輸入皮ヲ分捕リヤン者モ取山アリ」
 「コト戦後ノ朝ニシヨリ、輸入皮四十餘人ヲ殺シテナリ」

3. 戦報と講和

(1) 1895年、日清開戦間で結ばれた講和条約の名を答えなさい。

(2) 兩國の全權大使は?

① 日本側 () ()

② 清側 () ()

(3) 右の資料を参考に、条約の内容を4つ、簡潔書きにしよう。

① () () () ()

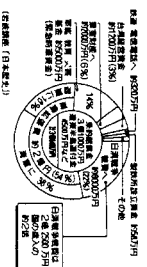
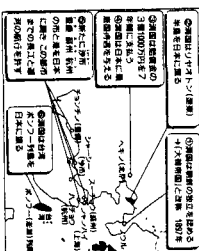
② () () () ()

(4) P. 210の地図を見ると、日本軍は、9.5 2.9に台湾に上陸している。それは向のためだろうか。

(5) 「三国干渉」に加わった3つの國の名を答えなさい。

(6) 「三国干渉」の内容は?

(7) この戦争で得た賠償金を、日本は何に使っていたのか? (→右図)



◇資料1

《事前学習後に生徒から出された疑問点》

- ①日清戦争には一体どういう利益があったのか？
- ②なぜ清の軍隊は戦意が乏しかったのか？　なぜ清は日本に負けたのか？
- ③教科書P. 210の「欧米諸国」ってどこか？
（一八九四年、朝鮮では、日本や欧米諸国の進出と政府に対する不満が爆発し・・・）
- ④どうして日本軍は台湾まで攻めていったのか？（教科書の地図）
- ⑤朝鮮の政府はなぜ「民衆の自治」を認めようとしなかったのか？
- ⑥農民戦争が起こったとき、なぜ政府は日本じゃなく清に援軍を頼んだのか？
- ⑦清に援軍を頼めば日本も来るのが分かっているのにどうして清に援軍を頼んだのか？
- ⑧なぜロシア・フランス・ドイツは、三国干渉をしたのか？
- ⑨日清戦争は国民にどんな反応を呼んだのか？
- ⑩全捧準は東学にかんする偉い人だったのか？
- ⑪イギリスはなぜ日本を選び、何を条件に日本との不平等条約を改正したのか？
- ⑫三国干渉は何を条件に交換したのか？
- ⑬日本が戦争するのに武器はどうやって用意できたのか？
- ⑭（日本が輸出した）綿織物は官営工場で作られたものも入っているのか？

おわりに

公開授業の批評会で、参加者の一人から厳しいご批判をいただいた。「どうして日本をこんなに悪者扱いするのか」「あなたは（日本が侵略された）元寇をどのように教えているのか」というものだった。教材研究したことをあれもこれもと欲張りをして未整理の状態でご公開授業に臨んだ結果、授業時間を大幅に延長してしまい、生徒にも参加者にも大変迷惑をかけることになったので、授業者としては「何を」をどう絞り込んでいくかについて論議したかったが、その発言者には授業の後半部で日本軍が朝鮮農民の蜂起を武力鎮圧し、全捧準を処刑したあたりの話を「日清戦争」の授業として受け入れることができなかったのだと思う。

最近、歴史教育に i f 思考を導入し、ディベートを展開したり、班討議をさせたりする実践を目にする。歴史に i f を持ち込むこと事態に批判もあるだろうが、過去の歴史事象を種々の判断材料を得て幾つかの選択肢を設定し、その路線選択の妥当性を論議するという授業は有効性のあるものだと思う。羽淵強一氏の「いつなら戦争への道を引き返せたか」と題した授業は、A. 一九〇四年日露戦争、B. 一九一四年第一次世界大戦、C. 一九三一年満州事変、D. 一九三七日中戦争、E. 一九四一年日米戦争の五つのエポックを提示し、A～Eのどの時点なら日本は戦争への道を引き返し、世界と平和に共存できる道をたどることができたのだろうかという興味深い実践報告だった⁽¹⁴⁾。ただ、その選択肢の最初は日露戦争であって、日清戦争ではないのである。日露戦争が帝国主義戦争であり、その後の韓国併合に直結することもあって、対外侵略性が見えやすいのに対して、日清戦争は朝鮮でおこった東学農民の反乱をきっかけに日清両軍が衝突し、日本が圧勝したという程度の

認識が定着しているのではないだろうか。しかし、日清戦争は、日本帝国主義の中国侵略50年の発端を形づくった戦争であるし、台湾の人々にすれば、これこそ被植民地民としての抑圧の歴史の始まりであった。私たちは日本および東アジアの近現代史における日清戦争の意義をもう少し深く受けとめるべきではないだろうか。

報告した実践はまだまだ練りの足りないもので、到底一時間で消化できる内容でもなく、その後は二時間に分けて授業をしている。ただ、「歴史の主体としての朝鮮」を位置づけるため、日本と清との戦いを軸とした日清戦争ではなく、東アジアをめぐる錯綜した国際情勢と腐敗した李朝封建遺制の中、自らの手で近代的改革を模索して蜂起した朝鮮民衆の戦いを軸とした日清戦争を、中学校でも展開したいと考え、構想したものである。今後は、内容の精選・提示の方法、生徒に考えさせ、討論させる場面の設定等、「どう料理するか」について検討し、実践を深めたいと思う。

〔註ならびに参考文献〕

- (1) E・H・カー 『歴史とは何か』(清水幾太郎訳) 岩波新書 一九六二年
- (2) 『近現代史』の授業改革2 特集/世界史の中の日露戦争(『社会科教育』一九九五年二月別冊 明治図書) 他
一九九四年から始まった雑誌『社会科教育』への藤岡信勝氏の「近現代史」の授業改革」の連載。
- (3) 大日方純夫 「自由主義史観」——どこからはじまりどこへ行くのか——(『歴史地理教育』一九九七年八月号)
- (4) 高橋史朗 「戦後教育がつくった『歴史認識』の問題点はどこか」(『社会科教育』一九九七年六月号)
- (5) 藤岡信勝/自由主義史観研究会 『教科書が教えない歴史』 扶桑社 一九九六年
- (6) 深澤秀興 「日清・日露戦争と国際的地位の向上」(前掲書『近現代史』の授業改革2)所収)

- (7) 安井俊夫 「自由主義史観」による日本近代史教育批判」(『歴史地理教育』一九九七年五月号所収)
- (8) 中塚 明 『蹇蹇録』の世界」 結章「現在につながる問題」 みすず書房 一九九二年
- (9) 藤村道生 『日清戦争』 岩波新書 / 「日清戦争」 岩波講座『日本歴史』
 「日清戦争と天皇制」 有斐閣新書 日本史(7)
- 中塚 明 『近代日本と朝鮮』 三省堂 / 「日清戦争」 岩波講座『日本歴史』
 「日清戦争は「義戦」だったか」(『日本近代史の虚像と実像1』 大月書店)
 「帝国主義の成立と東アジア」 有斐閣新書 日本史(7)
- 「日清戦争で日本政府は何をめざしたか」(『日本歴史と天皇』 大月書店)
 「今日からみた日清戦争」(『歴史地理教育』一九九四年八月号所収)
- 姜 在彦 「朝鮮からみた日本の征韓外交」 歴史公論NO. 57 / 「甲午農民戦争」 岩波講座『世界歴史』
- 姜 東鎮 「韓国から見た日本近代史 上・下」 青木書店 / 「朝鮮・中国の民衆からみた日清戦争」
- 朴 宗根 『日清戦争と朝鮮』 青木書店
- 加藤文三、本多公栄、吉村徳蔵 『100時間の日本史』 地歴社
- 坂野潤治 『近代日本の出発』 大系日本の歴史13 小学館
- 鈴木 良 「日清・日露戦争」 岩波講座『世界歴史』
- 井口和起 「日清・日露戦争論」 講座日本歴史8 東京大学出版会
- (10) 中塚 明 「『日清戦史』から消えた朝鮮王宮占領事件」(『みすず』一九九四年六月号)

- (11) 栗原 純 「日清戦争と台湾」〔歴史地理教育〕一九九四年八月号所収〕
- (12) 朴 宗根 「朝鮮民衆と日清戦争」〔歴史地理教育〕一九九四年八月号所収〕
- (13) 許 南麒 『火繩銃のうた』 青木書店
- (14) 羽瀨強一 「いつなら戦争への道を引き返せたか」〔社会科教育〕一九九七年六月号所収〕

(奈良教育大学附属中学校)